京都大学総合博物館　平成 30 年度企画展

京都大学文化財総合研究センター設立 40 周年記念展示・文化財発掘Ⅳ

足もとに眠る京都

― 考古学から見た鴨東（おうとう）の歴史 ―
飛鳥～室町時代編

2018

ごあいさつ

鴨川の東、比叡山から東山の山麓にひろがる一帯、「鴨東（おうとう）」と呼ぶ地域には、１万年前を超える古い時代から、さまざまな時期の遺跡が地中に残されています。なかでも、京都大学吉田キャンパスは、ほぼ全域が遺跡の上に位置しており、文化財総合研究センターが遺跡の発掘調査と研究を担い、さまざまな成果をあげてきました。

このたび、前身の埋蔵文化財研究センターの設立以来40年を迎えたことを記念して、キャンパス内の調査成果に加えて、京都市埋蔵文化財研究所による発掘資料や総合博物館の収蔵遺物もあわせて一堂に展示し、足もとに眠る飛鳥時代から室町時代の京都の歴史をひもときます。豪族たちの活動地から、やがて平安京・中世都市京都の郊外として、動乱のなかで周縁や中心となりながら性格を変容させていった地域のあゆみを、数々の資料から体感していただければ幸いです。

例　言

・ この冊子は、京都大学総合博物館において、2018年２月14日～６月24日に開催する平成30年度企画展『足もとに眠る京都－考古学からみた鴨東の歴史－飛鳥～室町時代編』（京都大学文化財総合研究センター設立40周年記念展示・文化財発掘Ⅳ）にあわせて、解説として作成したものである。
・ 執筆は、24・25頁を千葉豊、ほかを伊藤淳史が担当し、文化財総合研究センター全員の協力のもとに編集した。
・ 掲載資料と展示資料とは、完全には対応していない場合がある。
・ 掲載写真のうち、法勝寺塔跡復元ＣＧ（12頁）については冨島義幸氏、兵範記（14頁）については京都大学附属図書館より画像データの提供を受けた。また、（公財）京都市埋蔵文化財研究所より、以下の遺跡・遺物写真の提供を受けた。
（３～６、８、25、26、28～31、37、38）
・ 京都大学所蔵資料の写真については、寿福滋氏（寿福写房）の撮影による。

謝　辞

共同開催として旧石器～古墳時代編を展示する京都市考古資料館・（公財）京都市埋蔵文化財研究所には、資料提供などに格別のご配慮を賜りました。厚く御礼申し上げます。

〈表紙写真〉
北白川廃寺東方基壇（金堂）の調査風景（北西から・1934年）
〈裏表紙写真〉
梵鐘鋳造遺構での分析試料採取（南から・吉田南構内・1982年）

1 空から見た鴨東周辺（Google Earth Pro の画像を使用。縮尺約 2.5 万分の１。個別の遺跡位置は 29 頁を参照）

「鴨東（おうとう）」という名称は、地図に記されている正式な地名ではない。平安京の東、鴨川から東山にかけての範囲を指して使われることが多い。この展示では、そのなかでも、岡崎・聖護院・吉田・北白川といった北寄りの地域を対象とする。東方の山麓に発した白川が形成する扇状地上に位置し、標高 50 m～ 80 m程度のなだらかな傾斜がひろがる、２km四方あまりの空間である。発掘によって土の中の眠りから覚めた遺跡や遺物が語る、この小さな世界で繰りひろげられた古代～中世の歴史に、耳を傾けることにしよう。

2 平安時代の土馬（吉田南構内出土・1993 年） 全長約５cm

第１部：古代豪族の躍動　－比叡山麓の寺院と集落－

小倉町別当町遺跡
－比叡山麓を開発した有力集団の足跡－

北白川別当町に所在する北白川小学校付近を中心にひろがる、６～９世紀にかけての集落遺跡である。小学校の敷地内でこれまで３次にわたって実施されている発掘調査からは、７世紀代を中心に、多数の竪穴住居と掘立柱建物の跡などが見つかっている。

出土遺物には、土師器や須恵器の杯・蓋・高杯・甕といった、当時の基本的な食器類や調理道具のセットに加えて、無文銀銭や唐三彩、寺院との関わりを示唆する瓦塔など、稀少で特殊なものが含まれている。また、集落内からは、北側にある北白川廃寺で使われている軒丸瓦も出土していることから、寺院と集落の密接な関係がうかがわれる。

律令制のもとでは、この地は山背国（やましろのくに）愛宕郡（おたぎぐん）に属し、粟田（あわた）や錦織（にしごり）といった郷が所在していたとみられている。また、平安京への遷都以前、京都盆地東北のこの地一帯で活動していた有力な集団も、文字史料からいくつか知られている。大宝律令の制定に貢献し遣唐使を務めるなど、奈良時代初期の朝廷で重きをなした粟田真人を輩出した粟田氏のほか、小野氏や八坂氏など、現在も地名として残る氏族たちである。

比叡山麓一帯の開発を進め、やがては寺院（北白川廃寺）を築くに至るそうした有力集団のいずれかが拠点を置き、生活を営んだ場が、小倉町別当町遺跡の集落であったのだろう。市街地に良好な状態で残されている古代集落として、貴重な存在である。

３　小倉町別当町遺跡の発掘（北から・1994 年）

竈（かまど）をもつ竪穴住居　小倉町別当町遺跡からは、20棟近い竪穴住居が見つかっており、一辺５m程度の隅丸方形のものが多い。このうち半分ほどには、写真にみるようなつくり付けの竈の痕跡がみられる。

竈をつくり使う技術や習俗は、５世紀に朝鮮半島より伝来したもので、それまでの炉にかわって普及していったものである。飛鳥時代には、鴨東のこの地にも、あらたな技術と習俗がひろまっていたことがわかる。

４　竈をもつ竪穴住居（北東から・1994年）

５　無文銀銭（左）・唐三彩片（右）　実大

無文銀銭　中央に小孔をうがつ円板形の銀製品で、飛鳥時代における日本最古の貨幣とも評価される。近畿地方を中心に17遺跡25点以上の出土があり（今村啓爾『日本古代貨幣の創出』講談社学術文庫2015年による）、江戸時代に大阪で出土したと伝わる100点や、評価の定まらない事例も加えると、総数は130点ほどとなる。この資料は京都府下唯一の出土例で、径29.6～31.5㎜、重量9.5g、厚さ2.0㎜、銀含有率94.9%。また「高志」と読めるような文字やＴ字形が刻まれているものは、類例の少ない貴重な存在である。

参考：大英博物館所蔵唐三彩
弓場紀知編『中国の陶磁』３　三彩（平凡社）1995年より

唐三彩　唐三彩とは、中国唐代に製作された３～４色の釉をかける陶器のことである。小倉町別当町遺跡からは２点が出土している。ここに示した口縁部は、小片のため２彩しか認められないけれども、特徴からみて、写真で示すような大英博物館所蔵品である晩唐期の皿形製品に類するものと想定されている。年代的には、奈良時代以降に下るものであろう。

瓦　塔　瓦塔とは、塔を模した小型品を、須恵器と同質に堅く焼成したものである。完存品の場合２m程度の高さになるものが知られており、寺院や窯跡で出土することが多い。小倉町別当町遺跡の出土品は、残存片の角度からみて、珍しい六角形の塔の屋根部分である。やはり奈良時代以降のものになるとみられる。

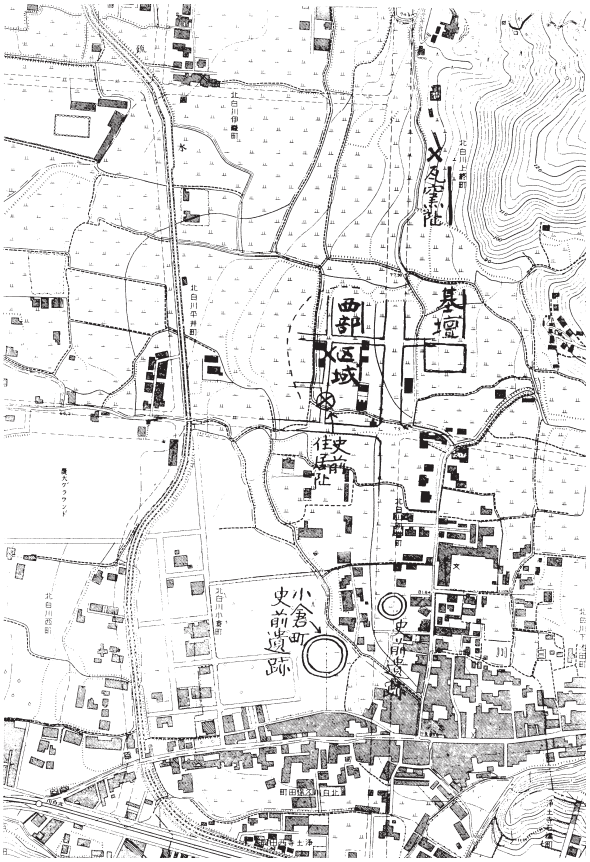
６　瓦塔片　約1/4
右図は瓦塔の例（埼玉県東山遺跡出土品）
田中琢・佐原眞編『日本考古学事典』（三省堂）2002年より

北白川廃寺
ー巨大基壇をもつ白鳳寺院ー

昭和９年（1934）、北白川上終町（かみはて）において、区画整理による道路造成に際して瓦積みの基壇と古瓦が発見され、寺院の存在が明らかとなった（表紙写真参照）。その後、京都市による数次にわたる調査によって、塔跡や回廊も確認され、伽藍の配置がおおよそ想定されるに至っている。

最初に発見された瓦積基壇は、寺院の中心施設である金堂であり、同時代の寺院としては最大級の東西 36 m×南北 23 mの規模をもっている。塔跡基壇は、当初は瓦積みの一辺 13.8 mのもので、法隆寺五重塔基壇（一辺 13.6 m）に近似する規模であったが、９世紀にその回りに石積みが施されるように改装されている。

軒瓦には、奈良県明日香村所在の山田寺出土品と同種のものが含まれ、創建は７世紀後半にさかのぼるとみられている。文字記録には知られていないため、その造営者は定かではないけれども、大和に所在していた中央政権とも関係する有力豪族の氏寺であったとする説が提出されている。



7　1934 年に発見された基壇の位置（『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』第十九冊、1939 年より）
この報告で「西部区域」とされた瓦の発見地点が、のちに塔跡と判明する。

8　北白川廃寺塔跡基壇の発掘（北西から・1995 年）
中央の穴は心礎跡。石積基壇は９世紀に改装されたもので、内側に瓦積基壇がある。

発見の経緯と調査の経過　昭和９年（1934）の北白川では、９月まで小倉町における縄文遺跡の発見と調査がおこなわれるなど、地中の遺跡存在について関心が高まっていた。それが、当時一帯で進行していた区画整理による掘削での古瓦や礎石の発見、引き続いての迅速な発掘調査の実施へとつながったといえる。調査の主体は、京都府史蹟勝地保存委員会という組織であったが、実務は当時その調査委員であり京都帝国大学文学部の教員であった梅原末治・赤松俊秀に委嘱され、現地の作業は小林行雄・水野清一・羽舘易ら文学部や東方文化學院京都研究所（現在の人文科学研究所の前身）の関係者が担うことになった。

工事により消滅する遺跡の記録保存という、緊急の発掘調査であったが、精密な記録と報告の作成がおこなわれ、その後の周辺での伽藍発見や寺院研究におおいに貢献する成果が残されることになった。出土遺物は、一帯での採集品とともに京都大学総合博物館に収蔵され、一部が常設展示されている。また、瓦積基壇の一部は、文学部陳列館南側に移築され、現在も目にすることができる。遺構の移築保存としては、最初期の先駆的な事例であるといえる。

９　京都大学に移築された瓦積基壇（文学部陳列館南側）

出土瓦の特徴　北白川廃寺の軒丸瓦のなかで最も古式とされるものは、重圏文縁をもつ蓮華文軒丸瓦で、641 年に造営がはじまった山田寺の瓦当文様の流れを汲む山田寺式である（写真 10 の最後列右端）。この特徴の瓦は、おもに金堂周辺で出土するのに対して、雷文縁をもつ軒丸瓦（同、右から２つめ）は、山科の大宅廃寺の瓦と同笵であることが知られ、寺院内いずれの地点でも出土している。一方で、その他の蓮華文軒丸瓦（同、左寄りの３点）は、おもに塔跡で出土することがわかっているものである。

軒平瓦（同、前２列）には、偏行唐草文という独特の意匠のほか、素文や、重弧文とよばれる平行線状の文様をもつものが知られている。

10　北白川廃寺の軒平瓦と軒丸瓦　最後列右端の軒丸瓦の径約 18 ㎝

飛鳥・奈良時代の京大構内

飛鳥時代　吉田キャンパスにおいては、飛鳥時代（６・７世紀代）の居住の痕跡は、はっきりしていない。ただし、その時期の遺物は、吉田南構内から北部構内にかけて、散発的に出土が確認できるほか、終末期古墳の周溝ではないかとみられる弧状の溝などが確認されている。この一帯のようすを確実に復元していくには情報不足であるが、墳墓がまばらに分布する景観であったのかもしれない。

11 終末期古墳の周溝の可能性がある溝
（北東から・本部構内・2001 年）

奈良時代の竪穴住居　奈良時代（８世紀）になると、本部構内の南端から吉田南構内にかけて、建物や井戸の遺構が見つかっているほか、北部構内でも遺存の良い遺物の出土が知られている。

本部構内南端で見つかった小型の竪穴住居２棟は、竪穴住居としては最末期の段階に位置づけられる貴重な事例であり、工事計画を変更して現地に埋め戻し、保存されている。

12 奈良時代の竪穴住居（南から・本部構内・1980 年）

13 奈良時代の掘立柱建物（南西から・吉田南構内・2002 年）

14 奈良時代の井戸の調査（東から・吉田南構内・2014 年）

奈良時代集落の性格　吉田南構内では、掘立柱建物や井戸が良好な状態で確認されている。ただし、これらはまとまって見つかるのではなく、ひとつの調査地点で１～２遺構程度と、ひろい範囲に散在しているような状態である。掘立柱建物の規模も、最大でも柱間が２間×３間までに収まるもので、大規模な邸宅や施設が存在していたとは想定しがたい。

一方で、出土遺物でみると、墨書土器や貨幣の存在から、ある程度の階層の人々が暮らしていた様子も、うかがわれる。とはいえ、現状では遺物の出土量は少なく、遺構の分布もまばらである。当時の鴨東には、北方の若狭～北陸方面へと向かう交通路が存在していたと想定する学説もあり、こうした考古学での資料状況を矛盾なく説明するには、このような重要度の高いルート沿いに散居していた村落を推測しておくのが、現状ではふさわしいかもしれない。

和同開珎（わどうかいちん）北部構内からは、遺存状態の大変良い和同開珎銅銭が出土している。和同開珎は、日本の律令国家が、本格的に流通させようと組織的に鋳造した貨幣としては、最初のものである。和銅元年（708）五月にまず銀銭が作られ、追って銅銭が作られたとされる。都から離れた地方への流通の一端をうかがわせる資料といえよう。

奈良時代の遺物　奈良時代の食器は、土師器と須恵器による杯や皿という、個人用といって良い小型で浅いうつわが基本で、つまみの付く蓋が組み合う。「麻呂」の墨書も、これら食器の所有者を知らしめるために書かれたのかもしれない。土師器の内面には、器面を細くこすることで筋状の光沢を得る暗文（あんもん）と呼ばれる装飾が施されている。放射状や螺旋状のモチーフが特徴的で、都城ではその変遷が把握されていることから、遺物の時期を比定する重要な指標となっている。

特異な資料としては、製塩土器とされるものがある（写真17の右下隅3点）。口縁の内湾するコップ状の形になるとみられ、手づくねで厚手の粗いつくりである。海浜部で精製した塩を運び、平城京や長岡京では数多く出土が知られているけれども、地方集落でどの程度出土するかについては、検討が及んでいない。

15 和同開珎銅銭（北部構内出土・1974年）　実大

16 墨書土師器「麻呂」（吉田南構内出土・1994年）
実大

17 奈良時代の遺物（本部および吉田南構内出土）　前列中央の皿の口径約12㎝

18 金箔と貨幣がともなう埋納遺構
（北から・北部構内・1992 年）

19 平安時代の土器・陶器類の一括出土状況
（北から・北部構内・1994 年）

平安時代前・中期の京大構内

吉田キャンパスにおける平安時代前･中期（9・10 世紀）の遺跡は、北部構内と吉田南構内に特筆すべき調査成果がある。

北部構内では、美しい緑釉陶器や灰釉陶器をはじめ、土師器や黒色土器などの各種製品がひとつの遺構からまとまって出土する地点がみられる。鴨東一帯には、場所は特定できないながらも、貴族層の別荘や寺院が点在していたことが文献史料の記述に知られている。墨書をもつ土師器や陶器の出土が目立ち、上質な緑釉陶器などが多く出土する様相は、そうした施設のいずれかが立地していた可能性を示していよう。また、土師器の皿と甕を組み合わせた埋納遺構から金箔と銅銭が出土した地点もあり、平安京北東郊外の祭祀空間でもあったのかもしれない。

なお、吉田南構内では、この時期の大量の土師器や土馬などの出土に加えて、梵鐘を鋳造した施設と関連遺物が見つかっており、鋳造遺跡の研究という分野の確立に重要な契機と資料を提供している（第４部において詳しく紹介）。

20 まとまって出土した平安時代の土器・陶器類（北部構内出土・1994 年） 最前列中央の皿の口径約 14 ㎝

灰釉陶器と緑釉陶器　平安時代になると、食器にはそれまでの土師器と須恵器に加えて、緑釉陶器と灰釉陶器という、有色の焼き物が加わり、華やかさを増した組み合わせになる。いずれも、高級品であった大陸産の磁器を模倣することを指向して国内で製作され、都城から地方へと普及していった。

灰釉陶器は、東海地方を中心に生産され、草木灰を原料とする釉によって、透明度のある淡緑色や白色を呈している。一方、緑釉陶器は、硅酸鉛に発色剤としての銅を加えた釉をかけて焼成する。その結果、光沢のある美しい緑色の表面に仕上がることになる。

21 緑釉陶器の陰刻花鳥文
（天地約６cm・北部構内出土・1994 年）

尾張産緑釉陶器の特徴　京都で出土する緑釉陶器製品は、洛北や洛西、丹波や近江など平安京の近郊と、尾張地方で生産されたものが中心となっている。それらは、文様や製作技術の違いなどでおおむね区別することができる。

写真 23 に示した製品にみるような、精巧な陰刻花文や、貼り付けによる高台、重ね焼きを示すトチンの痕跡、オリーブ色を帯びた発色は、尾張猿投窯（さなげよう）産の特徴を示すものである。

22 緑釉陶器・托（口径約 15 cm・北部構内出土・1994 年）

23 緑釉陶器・陰刻花文皿（口径約 16 cm・北部構内出土・1994 年）

第２部：古代から中世へ　－院政期の開発－

六勝寺（りくしょうじ）と白河街区

平安時代後期、鴨川を東へ越えた岡崎地域一帯に、勝の字をもつ六つの寺院（法勝寺・尊勝寺・最勝寺・円勝寺・成勝寺・延勝寺）が天皇や皇后の願いを承けて順に建立され、平安京に似せた東西・南北の道路により区画されたあらたな街がつくられた。六勝寺と白河街区である。

承保二年（1075）にはじまる白河天皇の法勝寺造営以降 100 年あまり、院政により権勢をふるった白河・鳥羽・後白河の３上皇の時代に、この地は政治的拠点として重要な空間となった。また、実権が武士へと移行していく時代の転換期でもあり、保元の乱における白河北殿焼亡など、争乱の舞台になったことが知られている。

現在、文献史料の記載と数多くの発掘調査の成果により、寺院や院御所など施設の多くについては、位置や規模がおおむね想定されている。しかし、それぞれの建物内部の伽藍配置などは不明な部分が多い。また、街区の地割りについても、確認された遺構はごく限られ、どの程度実際に施工されていたのかを含め、今後の課題として残されている。

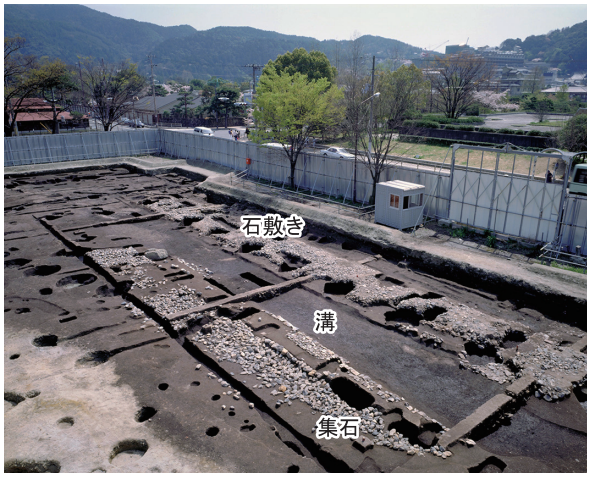
京都大学の吉田キャンパスは、病院構内が白河北殿の北辺地区にあたり、医学部～吉田南構内にかけても、街区が及んでいることを想定した研究もみられる。ただし、現在までのところ、出土する遺物には寺院との関連や祭祀色の強さがうかがわれるものの、伽藍や邸宅の存在や街区の地割りと確実に認定できる遺構は見つかっていない。

24 白河街区の復元（（財）京都市埋蔵文化財研究所編『院政期の京都　白河と鳥羽』2007 年に加筆）

法勝寺塔跡の発掘調査
ー八角九重塔の発見ー

六勝寺で最初に建立された法勝寺は、広大な寺域に、東大寺大仏殿に次ぐ規模の金堂や、園池内の中島に建てられた高さ81 mの八角九重塔などが立ち並び、「国王ノ氏寺」(『愚管抄』) と記述される壮大さを誇っていたとされる。このうち、塔の基壇は、京都市動物園内に戦前まで残っていた「塔の壇」と呼ばれる高まりに想定されてきた。

2010年に、京都市がその南側で実施した発掘調査で、深さ1.5 mまで地面を掘り窪め、巨石を混ぜた粘土を丁寧に突き固めた八角形の大規模な地盤改良跡が見つかった。これにより、八角九重塔が現実にその地に建っていたことが確定した。



25 二条大路の路面や側溝とみられる遺構群
(北西から・1991年)
現在の岡崎グランド内、法勝寺比定地の西側にあたる場所で、東西方向の溝の南側に石敷き、北側に集石が見つかった。位置からみて、溝が二条大路の側溝で石敷きがその路面、集石は北側に比定される最勝寺の築地にかかわる地業の可能性が指摘されている。

26 法勝寺塔跡の発掘調査(南から・2010年)

27 あらたな成果に基づいた法勝寺塔跡復元ＣＧ
復元考証：冨島義幸（京都大学大学院工学研究科建築学研究室）
ＣＧ制作：竹川浩平

八角九重塔の復元と出土遺物　2010 年の発掘調査では、創建時に葺かれたとみられる梵字文の軒瓦をはじめ、京都産や播磨産などの軒瓦類が多数出土している。こうした状況と、入念な地盤改良やその規模も考慮して、檜皮葺ではなく瓦葺きの、重厚な塔の姿があらたに復元されている。

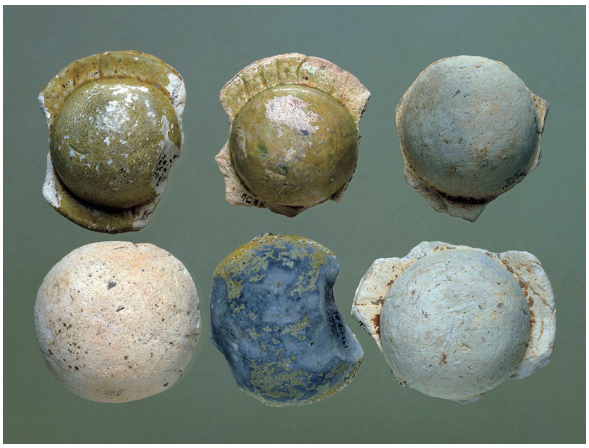
なお文献史料によれば、この塔は承元二年（1208）に落雷で焼失して５年後に再建されるが、暦応五年（1342）に再度火災で焼失し廃絶したとみられる。調査では、廃絶後のごみ穴から鎌倉時代の瓦類とともに高温により変形溶融した焼瓦も多数出土している。

梵字文軒瓦　軒の文様に梵字を配するこれらは、塔跡のみで出土が知られ、梵字の意味は、胎蔵界大日如来をあらわす。塔内に安置されたといわれる金剛界五仏とあわせて、両界曼荼羅の世界をあらわした可能性も指摘されている。当時の為政者たちが鎮護国家を願って建立した仏教寺院であることを象徴する遺物といえるだろう。

28 法勝寺塔跡 2010 年発掘調査の出土遺物
最後列左端の軒丸瓦の径約 15 ㎝

尊勝寺の発掘調査　法勝寺に次いで建立された尊勝寺は、六勝寺の中では発掘調査によって最も伽藍配置が良くわかっている寺院である。なかでも、寺域の西部で見つかっている南北方向の長大な建物は、石をぎっしり詰めた径２m近い礎石据え付け穴が整然と並び、九体阿弥陀堂と推定されている。また、大量に出土している瓦や仏教関係遺物の中で、墨書をもつ軒瓦や土製円塔は、当時の寺院造営や仏教儀式の雰囲気を伝える貴重な資料である。

29 尊勝寺九体阿弥陀堂礎石据え付け穴の並び
（西から・1977 年）



30 緑釉土製円塔（尊勝寺跡出土）
上列左端の資料の径７cm

緑釉土製円塔　白河街区一帯では、このような饅頭形の土製品がしばしば見つかる。大治三年（1128）に白河法皇は法勝寺で 183, 637 基の円塔を供養したと文献にみえる（『本朝続文粋』）。ここに示している資料も、こうした寺院での供養のために大量に製作し納められたものであろう。底面の墨書（「・・・裳層・・・七百卅・・・」など）は、安置した場所と番号を記したものかと推定されている。

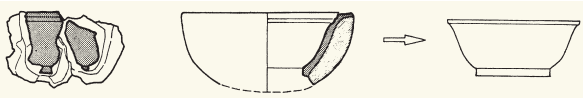
墨書軒平瓦　尊勝寺寺域内の一角で見つかった大量に瓦が廃棄された穴から出土した資料である。播磨系の軒平瓦の凸面側に、向かって右側から、以下のような枚数の記録とみられる文言が記されている。軒瓦にこのような墨書が確認されることはきわめて珍しい。

「□□三百卅八枚」「・□枚　又千百七十四枚（右横に）九十三枚」「・上七千・・六枚」「・・□
□□廿七枚　□十七枚」
と記されている。
（翻刻は六勝寺研究会『六勝寺跡』1976 年による）

31 墨書軒平瓦（尊勝寺跡出土）　天地約 34 cm

32 土師器皿の大量出土（北から・病院構内・1989 年）

33 六器鋳型・取瓶（とりべ）片
（左上鋳型の左右約 10 cm・医学部構内出土・1987 年）



参考：鋳型からの完成品想定
『京都大学構内遺跡調査研究年報　1987 年度』1990 年より

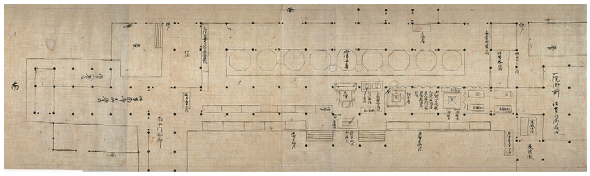
35 青銅製火舎香炉（器高約 10 cm・病院構内出土・1976 年）

36 四段積上式経筒の出土（南から・吉田南構内・2002 年）

平安時代後期（院政期）の京大構内

院政期の開発の波は、聖護院や吉田にもさまざまに及んできたことが、構内遺跡の発掘で判明している。病院構内は、院の御所である白河北殿の北辺にあたり、青銅製の香炉や人面墨書を含む土師器の大量出土など、宗教色の強い空間であったことを示す成果が得られている。しかしながら、現在までのところ、この時期の大規模な建物跡や園池は確認されていない。

福勝院と六器（ろっき） 文献史料によれば、鳥羽法皇の皇后高陽院（かやのいん）泰子により建立された福勝院が知られ、吉田付近に比定されている。その遺構は未確認であるが、医学部構内で鋳型が出土している青銅製の六器は、当時の史料『兵範記』に描かれている福勝院九体阿弥陀堂で執りおこなわれるような、密教の儀式に使用される椀形の法具である。この一帯が寺院の近傍であったことを示す資料であり、こうした青銅製品を供給する鋳造工房が構えられていたものと推測できる。



34 重要文化財『兵範記』（京都大学附属図書館蔵）の福勝院九体阿弥陀堂
京都大学附属図書館提供

青銅製火舎香炉 病院構内の発掘調査で、小さな穴から六器とともに出土した。密教壇上での儀式で香を焚くために用いられる法具で、遺存の良好な優品といえる。饅頭形の蓋に猪目の透かしをもち、下部の炉には小振りの猫足三脚が付されている。酷似した類品が、左京区花脊別所経塚で仁平三年（1153）の紀年銘をもつ経筒にともなって出土しており、ここに示す資料もそのころの製品に比定できる。

吉田南構内の経塚遺構 経塚とは、経典を地中に埋納した遺跡であり、末法思想の普及にともない 11 世紀以降に貴族層から風習がはじまり、ひろまったものである。吉田南構内で発見された経塚は、小さな石室を組み、経典を入れたとみられる経筒や 150 点あまりのガラス玉などを納めていた。市街地でこのような遺構が見つかることは珍しく、また青銅製の経筒が、九州を中心に分布する積上式というタイプであることも、特異な事例として注目される。

院政期の武士の館か
ー吉田泉殿町の発掘調査ー

西部構内南側の吉田泉殿町では、京都市埋蔵文化財研究所による 1996 ～ 1997 年の発掘調査で、石積み護岸の溝で画された 12 世紀後半の建物跡が見つかった。この時期の屋敷で、石垣に類するような石積みの護岸をともなう事例はきわめて珍しく、その性格が大いに注目される。

溝の外回りには防御柵的な柱列が確認される一方で、内部の建物跡は柱の細い簡素な作りで、瓦も出土していないため、貴族層の邸宅とは異なるものと評価される。

しかし、出土遺物には高麗青磁のような希少な輸入陶磁が含まれ、また土師器皿の大量廃棄がみられることからみると、相応の経済力を有した住人が推測されてくる。白河に近接するという立地と、遺構や遺物にみる特徴とを勘案して、院政期にその権力と結びつくことで台頭してきた武士の館跡、とする見解が示されている。

37 高麗青磁梅瓶の破片（吉田泉殿町遺跡出土・1997 年）
図は『平成８年度　京都市埋蔵文化財調査概要』1998 年より

38 館の北側を画する石積み護岸の溝と、その外側の柱列（吉田泉殿町遺跡・東から・1997 年）

第３部：中世都市京都のひろがり　－近郊の屋地と葬地－

「吉田泉殿」の発掘調査

西部構内の所在地である「吉田泉殿町」という地名は、鎌倉時代前半期に朝廷で権勢をふるった公卿西園寺公経（きんつね）（1171 ～ 1244）が営んだ別邸の呼称に由来している。泉殿とは、池を配した庭園をともなう殿舎を指してひろく使われる用語であり、吉田に所在するそのような屋敷、ということになる。

39 調査風景（北から・西部構内・2008 年）

2007 ～ 2008 年にかけて実施した西部構内の発掘調査では、南北に石敷を配して内部に大がかりな地盤改良（掘込地業）を施した一辺 11 m あまりの方形建物や、色玉石を敷いた祭祀遺構、園池に関連する景石や流路跡が見つかっており、鎌倉時代の瓦や土器類も大量に出土している。

文献史料によれば、公経の没後も、鎌倉時代を通じて上皇や院のこの地へのたびたびの行幸が記録されている。しかし、南北朝期の動乱によって途絶え、室町時代には荒廃してしまったようであり、出土遺物も鎌倉時代の資料に限定されている。もっとも、現在の西部構内にあたる一帯には、江戸時代の村絵図に「和泉」の字名を付した田畑のひろがりが認められ、水石跡が残っていたとする地誌の記述もある。このように、地名により長らく伝承されてきた園池をともなう邸宅の存在が、発掘調査により具体的に裏付けられた貴重な事例といえるだろう。

40 鎌倉時代方形建物の石敷と地盤改良（東から・西部構内・2008 年）
石敷の左手側の建物内部を掘り下げて、礫をぎっしりと入れることで地盤の強化をしている。

景石と流れの遺構　吉田泉殿にかかわる文献には、池での遊泳や湧水の枯渇についての記事も知られている。発掘した範囲では、深い池の遺構は見つかっていないが、精良な砂が堆積する流れの跡や、その岸に配された景石を確認している。現在は地下水位の低下により全く湧水することはなく、鎌倉時代にあっても、豊富な湧水を安定して得るにはかなりの苦労をともなったと推測される。調査成果からみると、比叡山麓を流れ下る河川も活用した園池であったのだろう。

色玉石の祭祀　２ｍ四方程度の範囲に、白色の玉石（円礫）を敷き詰めたうえで、赤色や黒色、灰色など有色の円礫を中央付近に配した遺構が見つかっている。下部には掘り込みがあり、また上面には土師器皿がまとまって廃棄されていた。

平安京域における古代～中世の邸宅関連の遺跡では、湧水する泉に白色円礫を敷いた例が知られることから、この遺構も、湧水場の祭祀が最終的に廃棄された状態を示しているのかもしれない。当時の貴族層の水や色彩に対する嗜好や観念をうかがううえで、興味深い事例である。

吉田泉殿の瓦　西部構内からは、軒先に剣頭文や巴文という幾何学的な文様をおもに用い、古代と比べてかなりこぶりとなった鎌倉時代の瓦がまとまって出土している。軒先以外の平瓦や丸瓦の出土量は多くないことから、総瓦葺きではなく、棟の頂部や塀にともなうものだったかもしれない。またそれらには、製作した工人を示す記号ともいわれる刻線記号や刻印が施されている。中世における瓦生産の体制や流通のありようをさぐる手がかりとして重要な情報である。

41 景石を配した浅い流れの跡や高まり（右手の土手は土層観察用の畔）（西から・西部構内・2008 年）

42 色玉石を敷いた遺構（北から・西部構内・2008 年）

43 出土した色玉石と土師器（右下隅の皿の口径 6.6 cm）

44 吉田泉殿で使われていたとみられる軒瓦（左下の軒平瓦の幅約 16 cm）

鴨東の中世
ー岡崎の衰退と吉田の発展ー

院政期に壮大な伽藍が軒を連ねた岡崎の地は、東国の武家政権へと移行するなかで、たび重なる戦乱と災害からの復旧が果たされず、荒廃していったとみられる。

一方、北側の聖護院や吉田一帯では、中世都市京都の近郊として、居住や葬送のみならず、鋳造や砂の採取など、さまざまな活動に利用されていたことが、発掘から明らかとなっている。

吉田キャンパスにおける鎌倉・室町時代の遺跡をみると、建物や井戸といった居住にかかわる遺構や遺物が濃密に出土するのは、とくに本部構内以南の吉田地区である。鎌倉時代には、さきに吉田泉殿で触れた西園寺家、それに勧修寺家といった貴族層が屋敷や仏堂を構えたことが文献に知られ、室町時代になると、15 世紀後半に吉田山上に移るまでは山麓にあった、吉田社にかかわる集団の活動も想定されてくるようになる。

中世白川道の遺構　京都大学の本部構内は、現在は「志賀越え道」や「山中越え」などと呼ばれている京の荒神口から近江へ抜ける交通路、「白川道」の上に位置している。

幕末に尾張藩邸の敷地となって廃絶するまでの各年代の路面の遺構が、発掘調査では連綿と確認されており、現状では 13 世紀初頭にさかのぼる段階まで把握できている。

近世の路面が、幾重も深く重なった荷車の深い轍（わだち）の痕跡が特徴的であるのに対して、中世の路面は、流水でえぐられたような多数の窪みを砂混じりの土で埋め堅くたたき締めたもので、轍はみられない。また、道筋も、中世の段階は、時計台の北側を通る比較的屈曲のないものとなっており、近世にかけてある時期に北へと移ったことが判明している。道を利用する手段や頻度の変化は、その段階の社会情勢を反映しているとみられ、厳密な時期を特定していくことが、今後の検討課題となっている。

いずれにしろ、中世を通じてこのような重要なルート沿いに位置していたことも、吉田地区が発展へと導かれた要因であったのだろう。

45 中世白川道の路面発見を紹介する現地説明会（南西から・本部構内・2002 年）

中世京都を象徴する遺構

吉田地区の中世遺跡を特徴づけるのは、密集重複する柱穴をはじめとした各種の遺構群と物の大量廃棄である。これらは、この地に暮らし活動する人々の増加と、豊富な物資流通と旺盛な消費のくり返しを物語っているといえよう。それは、吉田地区に特有なものではなく、中世の都市遺跡に共通して認められる特徴であって、平安京から中世都市京都へと変容した空間の一端に、この地も連なっていることを示している。

複雑に絡み合ったさまざまな建物や井戸などについて、それぞれの帰属時期を特定し、性格や配置を復元していく作業が続けられている。例えば、門の遺構は、屋敷の出入口や格式を推測する重要な手がかりである。

また、中世の京都を最も特徴づけているのは、ろくろを使わず手づくねで作られた土師器の皿（かわらけ）であり、膨大な量が一度に廃棄された遺構が、構内遺跡においても頻繁に見つかっている。儀礼的な用途に供する使い捨ての器であったとする理解が主流だが、確定されるには至っていない。その考古資料としての研究については、後に触れることにしたい。

46 中世土師器皿（かわらけ）の大量廃棄
（西から・本部構内・1980 年）

47 門の存在を示す柱穴（東から・吉田南構内・1981 年）

48 密集する中世の柱穴や井戸（南から・医学部構内・2010 年）

49「度嶂散」墨書のある土師器蓋
（径 7.5 cm・病院構内出土・1989 年）

50 中世の貿易陶磁
（最奥の壺の器高約 21 cm・構内各所出土）

51 黄釉陶器の盤（口径 34 cm・本部構内出土・1988 年）

中世の日常を物語る品々

構内から出土した列島産の食器・調理具・文房具などと、大陸産の貿易陶磁を紹介する。文字記録に残りにくい中世の日常生活や交流の様相について貴重な情報を提供してくれる資料群である。

度嶂散とは　古代末～中世前半に、白色の小さな蓋にこのように墨書した資料がしばしば出土する。元日に宮中で献じられる飲み薬として、「度嶂散（どしょうさん）」が知られ、類似の正月儀礼がこの地でもおこなわれていたとわかる。それに用いた薬容器の蓋であったのだろう。

中世の貿易陶磁　各地の中世遺跡で発掘調査が進んだ結果、中国大陸から輸出された陶磁器のひろい普及が明らかとなっている。主体は椀皿類で、なかでも龍泉窯（浙江省）系とされる蓮弁状の装飾をもつ青磁椀が普及している。構内の出土品も同じ傾向を示すが、合子や置物は特殊な用途に用いるもので、一般の中世集落とは異なる使用者の性格や階層を反映している可能性がある。

黄釉陶器盤　径の大きな洗面器形の器を、盤と呼ぶ。黄釉陶器の生産地は中国福建省泉州の窯跡が知られており、この資料も輸入品である。口縁の形状や文様構成から、13 世紀前半代に比定される。全体の遺存が良い優品で、内面に「福海寿山」の吉祥句を描くものは類例がない。

52 中世の列島産食器・調理具・道具類（最奥の壺の器高約 34 cm・構内各所出土）

さまざまな葬送

京都大学周辺の神楽岡は、古来葬地としても知られている。北部構内では、正方形の二重の溝で囲む中世初頭の遺構が見つかり、古代～中世の皇族の葬送記事にみるような、火葬所跡地に塚を築いた火葬塚に相当すると判断された。きわめて珍しい事例であり、本来想定されるマウンドとともに現地に復元している。このほか、中世墓とみるべき遺構は各所で確認され、居住施設と混在している。本部構内では、鉄鍋に古瀬戸の皿で蓋をし、さらに鉄鍋をかぶせて鉄瓶を伏せて置くといった特異な葬法の墓が見つかっている。同じ地点では、備前産の摺鉢を蔵骨器として埋置した墓もあり、内部から焼けた骨片が出土している。

大ヤツカサ（オオヤツカサ）土器

吉田南構内や医学部構内では、14 ～ 15 世紀代を中心に、径が 20 ㎝を超えて底部が極端に上げ底となる大皿がまとまって出土している。現在も、賀茂別雷神社（上賀茂神社）の神饌では、酷似する中高の皿形土器を「ヤツカサ」と呼称し、六寸の大ヤツカサに鯛一尾を盛る、といった内容が知られる。これらの出土品も、神事にかかわる儀礼に用いられた可能性が考えられる。

文書にみる吉田－家領の処分状から－

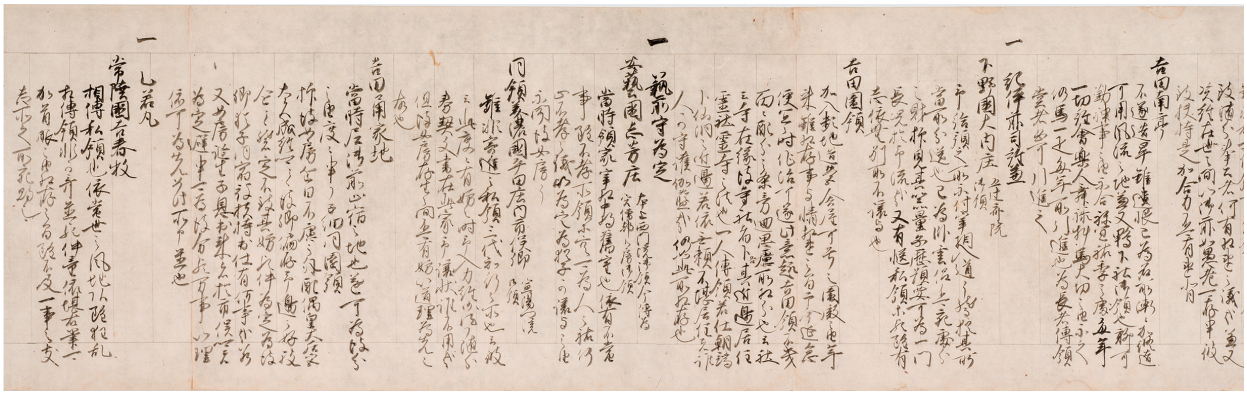
写真 57 の文書は、正治二年（1200）に、藤原経房という公卿が、所領や屋敷など財産を子孫に配分することを記した処分状である。そこには、「吉田南亭」「吉田園領」「吉田角家地」などの記載が見える。のちに勧修寺を家名とするこの一族は、その後南北朝期に至るまで代々の財産継承にかかわる文書を残し、たびたび「吉田」の地名が登場する。場所の特定には至っていないものの、吉田キャンパス一帯の中世遺跡のいくつかはこうした人々の残したものとみて間違いないだろう。

53 火葬塚の検出（西から・北部構内・1978 年）

54 鉄鍋埋納遺構（左・東から）、摺鉢利用の墓（右・北から）（いずれも本部構内・2001 年）

55 埋納遺構や墓に利用された鉄鍋・鉄瓶・皿と摺鉢（鉄鍋の径約 26 ㎝・本部構内出土・2001 年）

56 オオヤツカサ土器（手前左側の土器の口径 22 ㎝・吉田南構内出土・1994 年）

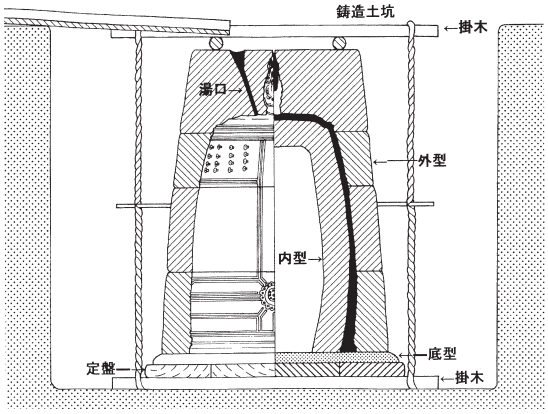


57 藤原経房処分状（部分）（勧修寺家文書・御遺言条々より）

第４部：京都大学構内における発掘調査と研究

58 梵鐘鋳造土坑の調査（北から・吉田南構内・1994 年）

59 定盤（じょうばん）の残る梵鐘鋳造土坑（北から・吉田南構内・1982 年）



60 梵鐘鋳造状況の解説図
五十川伸矢『東アジア梵鐘生産史の研究』（岩田書院）2016 年より

構内遺跡の調査が、考古学や関連する諸分野に貢献してきた成果は、縄文時代の遺跡から幕末の藩邸にかかわるものまで多岐にわたる。ここではそれらのうち、とりわけあらたな研究領域の開拓と進展に重要な役割を果たした、古代～中世における鋳造遺跡の調査成果と出土土師器の編年研究を紹介する。

鋳造遺跡の研究

吉田南構内では、1981 ～ 82 年と 93 ～ 94 年の２度の調査で、青銅の梵鐘を鋳造した 10 世紀はじめごろの方形土坑が計６基見つかり、鋳型や羽口など関連する遺物が多数出土している。梵鐘のような大型鋳物は、寺院の近傍に工人が出向いて１～２基程度で鋳造するのが一般的であるため、このような大がかりな施設は異例の存在である。その重要性に鑑みて、遺構は現地に埋め戻し保存し、上面にその形状を示す模型を設置している。

80 年代以降、鋳造関連の遺跡が相次いで発見され、考古学における一研究分野として定着していく過程で、京大構内の事例はその端緒となるもので、進展に寄与する多くの貴重な資料と研究・分析の指針を提供することになった。

鋳造関連遺物　鋳造遺跡からは、製品が出土することは稀で、廃棄された鋳型の断片のほかには、膨大な量の滓（さい）（金属のかす）や炭化物などが出土する。地上部に設置される部分は痕跡が残りにくいため、これら多量の廃棄物に混じって出土する構造物の破片を抽出することも重要となる。先端が著しく被熱溶解した大型の羽口は、民俗例に知られているように地上の溶解炉が設置されていたことを想定させる。

61 出土した梵鐘や鏡の鋳型
（右上隅の鋳型の幅約８cm・吉田南構内出土・1982 年）

62 ふいご羽口（左３点）や溶解炉に接続する羽口（右）
（右側羽口の内径約 15 cm・吉田南構内出土・1994 年）

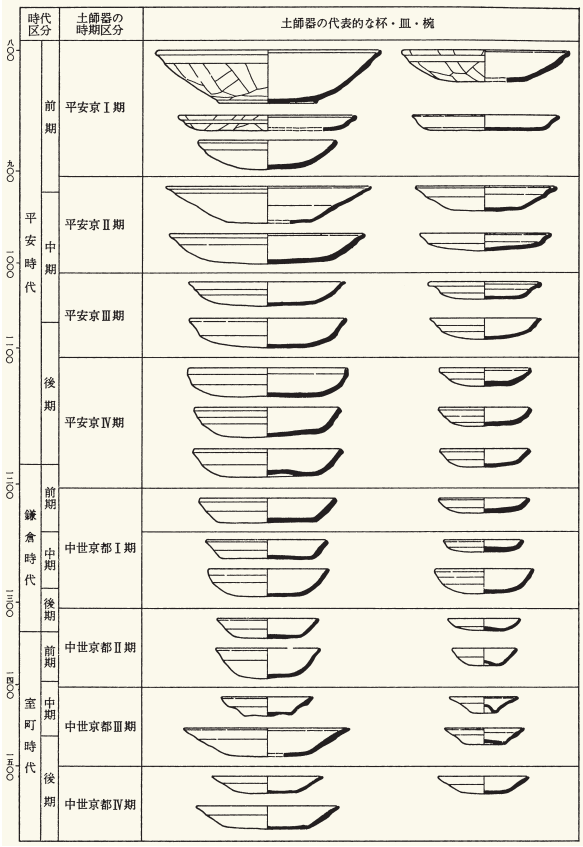
古代～中世土師器の編年

中世都市京都では、手づくねで成形した土師器の皿が大量に出土することはさきに触れた。1970年代以降、発掘の増加にともない、それらの新古の順を検討する編年作業が活発になっていく。構内遺跡においても、平安時代以降の編年が早い段階で体系化され、精度の高い時間軸として重要な役割を果たしていくことになる。ここでは、近年の遺構単位の発掘資料のなかから椀皿類を選び、９～15世紀の編年順に配列した。

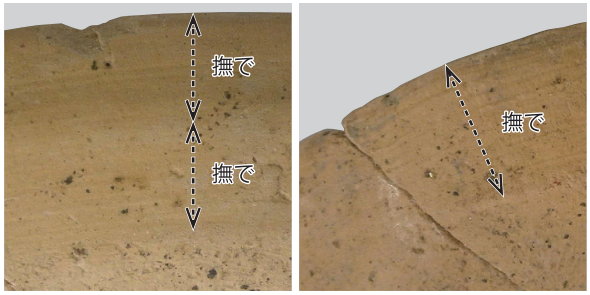
９・10世紀　９世紀は、径の大きな杯や皿の外面を丁寧な磨きや削りで仕上げており、奈良時代までの都城でおもに使われる製品の特徴をとどめている。10世紀以降、撫でて簡素に仕上げた薄手の皿が大量に出土するようになり、その後の「かわらけ」的な皿のはじまりとなる。この段階は、「て」字状口縁と呼ばれる独特の湾曲した口縁形状をしている。

11～13世紀　11世紀以降、「て」字状口縁は痕跡的になり、12世紀以降、口縁部を２段に撫でて仕上げる大小の深い皿形が定着する。13世紀には、口縁部の撫では１段になり、後半には白色を呈する椀形があらたに出現し並存していく。

14・15世紀　14世紀代は、褐色の皿と白色の椀がそれぞれ製作され続け、いずれも時期が下るほど径は小さく粗雑な作りとなっていく。15世紀には、これら二系統の椀と皿は融合するかのように分化が曖昧となり、代わって複数の法量規格がうかがえる桃色系の色調の皿へと変化する。このころは、上げ底状の椀（ヤツカサ）も目立つ。



63『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅱ』（1981年）所収の変遷図



64　皿口縁部外側の２段撫で（左）と１段撫で（右）

65　９～15世紀の土師器皿（右端下段の皿の口径約16㎝・構内各所出土）

構内遺跡調査研究の歩み

京都大学構内における埋蔵文化財の調査・研究、保存・活用を恒常的におこなう組織として、埋蔵文化財研究センター（現・文化財総合研究センター）が発足して以来、2017 年で 40 周年という節目の年を迎えた。この間、149 件、面積で 13 万㎡を超える発掘調査を実施してきた。ここでは、こうした調査・研究の歩みをふり返りつつ、当センターの活動・役割について紹介したい。

前　史　大学構内に遺跡が存在することが明らかになったのは戦前のことである。1923 年 10 月、文学部考古学講座の初代教授、濱田耕作が北部構内を散歩中に、磨製石斧を採集したことがきっかけとなった。北白川追分町遺跡（当時は、京大農学部構内遺跡と呼ばれた）の発見である。遺跡発見直後におこなわれた試掘調査では、遺物の出土は見たものの、遺跡自体は校舎建設の工事で削平されてしまったと考えられた。

こうした認識を大きく変えたのが 1972 年、農学部総合館の建設工事中に偶然発見された石棒であった。石棒の発見によって、すでに破壊されたと考えられていた北白川追分町遺跡が地中深く残っていることが明らかになり、北部構内で計画されていた校舎新営工事に先立って、発掘調査が実施されるようになったのである。

埋蔵文化財研究センターの発足　学内の発掘調査を円滑に進めるために設置された埋蔵文化財調査室を経て、1977 年 7 月に埋蔵文化財研究センターが設置された。学内の発掘調査は、京都大学構内遺跡調査会がおこない、センターは学内の遺跡の研究・保存・活用を担う体制が整えられた。なお、1992 年 4 月以降は、発掘調査も埋蔵文化財研究センターが担うようになり、2008 年 4 月にはセンターは組織改編され、文化財総合研究センターとなって現在に至っている。

構内遺跡の認定　1976 年度以降、吉田キャンパス全域において、建物新営や埋設管工事などにともなって、試掘調査や立合調査が実施され、遺跡の有無が確認されるようになった。

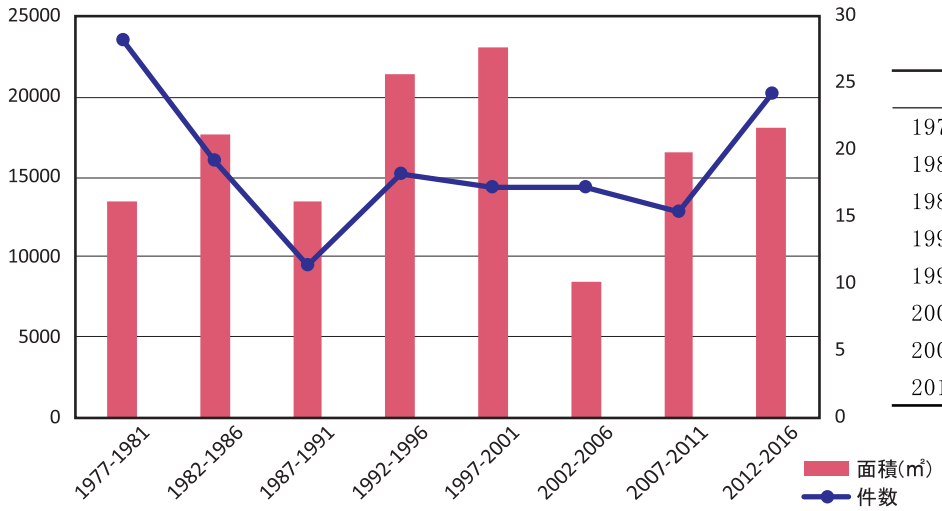
その成果は、京都市が刊行している遺跡地図にあらわれている。1972 年の段階では、北部構内（北白川追分町遺跡）と熊野構内（白河北殿比定地）が吉田キャンパス内に存在する遺跡として登録されているだけであったが、1977 年の遺跡地図では、本部構内東半、吉田南構内、医学部構内から病院構内東半にかけてのひろい範囲が遺跡として登録されている。そして、現在では病院西構内の西辺を除いて、吉田キャンパスのほぼ全域が周知の遺跡となっているのである。

発掘件数・調査面積の推移　図 66 は埋蔵文化財研究センター発足後 40 年間における発掘調査の件数と発掘面積を 5 年単位でみたものである。

発掘件数は最初の 15 年間（1977 ～ 1991 年）では減少傾向にあるものの、調査面積にそれほどの変動はない。1992 ～ 2001 年の 10 年間は 5 年単位でいずれも 2 万㎡を超える調査面積となっている。発掘件数に大きな変動がないので、これは大規模な工事が多かったことを示している。

2002 ～ 2006 年の 5 年間は、発掘件数に変動はないものの、調査面積は 1 万㎡を割り込む。比較的小規模な発掘調査が多かったことになる。2007 年以降は、発掘面積は再び増加傾向に転じ、発掘件数も増加の方向にある。

ちなみに、吉田キャンパスにおいて、現在までに発掘調査を終えた面積は全域の約 15%である。



年度	件数	面積(㎡)
1977–1981	28	13467
1982–1986	19	17671
1987–1991	11	13518
1992–1996	18	21362
1997–2001	17	23090
2002–2006	17	8452
2007–2011	15	16579
2012–2016	24	18112

66 京都大学構内遺跡における発掘調査件数、調査面積の推移

主要な遺跡　40 年間で調査してきた遺跡は、縄文時代から近代の帝国大学時代の遺跡にまで及ぶ。前章で詳述した古代・中世以外の時代について、主な遺跡をごく簡単に解説しておこう。

北部構内の北白川追分町遺跡は、近畿地方の縄文時代研究をけん引してきた遺跡として重要である。住居や墓地、埋没林などが見つかっている。

弥生時代になると、吉田南構内と北部構内で前期の水田遺構と中期の方形周溝墓が見つかっている。大規模な土石流の跡もあり、先史時代の自然災害研究にも貴重なデータとなっている。

古代以降の開発で削平されてしまい、墳丘を確認することはできないが、吉田南構内から本部構内にかけて、古墳が築かれていた。吉田南構内で 2011 年に実施された調査では、方形の古墳の溝から多量の埴輪が出土している。

幕末には、北部・本部・熊野の各構内に藩邸が設置され、発掘調査でその跡が確認されている。

遺跡の保護　発掘の結果、歴史的資料としての重要度が高く、またキャンパス一帯の過去を象徴すると判断される遺跡については、現地に埋め戻すか、あるいは遺構を移築することによって保存や復元の処置をとってきた。北部構内の火葬塚の復元は、当時の歴史的景観をイメージさせる貴重な空間となっている。

１世紀を超えて研究と教育の空間が形成されてきた本学のキャンパスには、埋蔵文化財のほかに歴史的建造物も数多く残されている。遺跡の保存と活用は、それらと調和のとれた共存をはかりつつ歴史的景観を作り出す実践的活動となろう。

文化財情報の社会的発信　遺跡の保護活動とともに、長期にわたる調査で得られた文化財情報やそれに基づく研究成果をひろく社会に発信していくことも重要である。個々の調査の記録は、研究年報や発掘調査報告書として刊行しているほか、現地での発掘調査説明会も開催している。

1989 年に開室した資料室（尊攘堂）には、縄文時代から近代にいたる土器や陶磁器・瓦などを展示し、京都大学構内における土地利用の歴史を考古資料から通観できるようにしている。また、2014 年度から本学総合博物館と共同で特別展「文化財発掘」を開催している。

そして、未来へ　遺跡の調査・研究、遺跡の保護活動、文化財情報の社会的発信。この３本の柱を堅持して、京都大学の地中に眠る歴史遺産を未来に活用していくことが私たちの役割である。

67 縄文時代の配石遺構（西から・北部構内・1973 年）

68 弥生時代の水田遺構（北東から・吉田南構内・1994 年）

69 保存・復元された火葬塚（西から・北部構内）

70 文化財総合研究センター資料室（尊攘堂）

〈展示品目録〉

遺物種類	出土遺跡（京大の場合は構内）	点数	年代	所蔵・保管＊
第１部：古代豪族の躍動				
無文銀銭（京都市指定文化財）	小倉町別当町遺跡	1	7 世紀	京都市
唐三彩皿破片	小倉町別当町遺跡	1	9 世紀	市埋
瓦塔片	小倉町別当町遺跡	1	8 世紀	市埋
土師器椀・甕	小倉町別当町遺跡	3	7 世紀	市埋
須恵器杯・蓋	小倉町別当町遺跡	7	7 世紀	市埋
滑石製紡錘車	小倉町別当町遺跡	1	7 世紀	市埋
軒丸瓦	北白川廃寺	5	7 ～ 8 世紀	総博
軒平瓦	北白川廃寺	6	7 ～ 8 世紀	総博
軒丸瓦	北白川廃寺	3	7 ～ 8 世紀	市埋
軒平瓦	北白川廃寺	1	7 ～ 8 世紀	市埋
平瓦	北白川廃寺	2	7 ～ 8 世紀	市埋
鬼瓦	北白川廃寺	1	7 ～ 8 世紀	市埋
灰釉陶器浄瓶	北白川廃寺	1	9 世紀	市埋
須恵器杯・蓋・壺	本部・吉田南	4	8 世紀	京文
土師器皿・椀	吉田南	3	8 世紀	京文
墨書土師器「麻呂」	吉田南	1	8 世紀	京文
製塩土器片	吉田南	3	8 世紀	京文
和同開珎銅銭	北部	1	8 世紀	京文
灰釉陶器椀・皿	北部	3	9 世紀	京文
緑釉陶器椀・皿	北部	2	9 世紀	京文
白色土器椀・皿	北部	2	9 世紀	京文
黒色土器椀・鉢・甕	北部	3	9 世紀	京文
土師器皿・高杯・甕	北部	5	9 世紀	京文
土馬	吉田南	1	9 ～ 10 世紀	京文
緑釉陶器陰刻花文皿	北部	1	9 世紀	京文
緑釉陶器托	北部	1	9 世紀	京文
第２部：古代から中世へ－院政期の開発－				
梵字文軒丸・軒平瓦	白河街区（法勝寺跡）	5	11 ～ 12 世紀	市埋
軒丸瓦・軒平瓦	白河街区（法勝寺跡）	9	11 ～ 12 世紀	市埋
鬼瓦	白河街区（法勝寺跡）	1	11 ～ 12 世紀	市埋
焼瓦	白河街区（法勝寺跡）	多数	13 世紀以降か	市埋
宝塔文軒丸瓦	白河街区（法勝寺跡）	1	11 ～ 12 世紀	総博
緑釉土製円塔	白河街区（法勝寺跡）	1	12 世紀	総博
緑釉土製円塔	白河街区（尊勝寺跡）	6	12 世紀	市埋
墨書軒平瓦	白河街区（尊勝寺跡）	1	12 世紀	市埋
墨書土師器皿	病院	4	12 ～ 13 世紀	京文
土師器皿	病院	2	12 世紀	京文
六器鋳型・取瓶片	医学部	6	12 世紀	京文
青銅製経筒破片	吉田南	多数	12 世紀	京文
ガラス玉	吉田南	多数	12 世紀	京文
青銅製飾金具	吉田南	2	12 世紀	京文
高麗青磁梅瓶片	吉田泉殿町遺跡	多数	12 世紀	市埋
土師器皿	吉田泉殿町遺跡	多数	12 世紀	市埋
青銅製火舎香炉	病院	1	12 世紀	京文

遺物種類	出土遺跡（京大の場合は構内）	点数	年代	所蔵・保管＊
第３部：中世都市京都のひろがり－近郊の屋地と葬地－				
軒平瓦・軒丸瓦	西部	6	13 世紀	京文
平瓦・丸瓦	西部	3	13 世紀	京文
土師器皿	西部	6	13 世紀	京文
玉石	西部	多数	13 世紀	京文
墨書土師器蓋「度嶂散」	本部	1	13 世紀	京文
瓦器椀	本部・医学部	4	13 ～ 14 世紀	京文
瓦器壺・鍋・羽釜	本部・吉田南・医学部	4	13 ～ 14 世紀	京文
瓦器盤	病院	1	13 世紀	京文
灰釉系陶器椀・皿・四耳壺	本部・吉田南・医学部	6	13 ～ 15 世紀	京文
陶器常滑壺	病院	1	13 世紀	京文
古瀬戸卸皿・皿・花瓶	本部・吉田南・医学部	3	13 ～ 15 世紀	京文
東播系須恵器摺鉢	吉田南	1	13 世紀	京文
滑石製鍋	医学部	1	13 世紀	京文
石製硯	吉田南・医学部	3	13 ～ 15 世紀	京文
滑石製温石	医学部	1	13 ～ 15 世紀	京文
砥石	医学部	1	13 ～ 15 世紀	京文
滑石製紡錘車	吉田南	1	13 ～ 15 世紀	京文
白磁椀・皿	本部・吉田南・医学部	5	13 ～ 15 世紀	京文
青磁椀・皿	本部・吉田南・医学部	7	13 ～ 15 世紀	京文
青白磁皿・合子・置物	吉田南・医学部	4	13 ～ 15 世紀	京文
褐釉四耳壺	吉田南	1	13 世紀	京文
鉄鍋	本部	1	13 世紀	京文
三足付鉄瓶	本部	1	13 世紀	京文
古瀬戸皿	本部	1	13 世紀	京文
陶器備前摺鉢	本部	1	13 世紀	京文
オオヤツカサ土器	吉田南	3	15 世紀	京文
黄釉陶器盤	本部	1	13 世紀	京文
勧修寺家文書（御遺言条々） （５月 23 日～６月 24 日に展示予定）		1		総博
第４部：京都大学構内における発掘調査と研究				
梵鐘鋳型・鏡鋳型	吉田南	5	10 世紀	京文
黒色土器椀（墨書有）	吉田南	1	10 世紀	京文
羽口	吉田南	4	10 世紀	京文
銅滴・銅滓	吉田南	多数	10 世紀	京文
炭	吉田南	多数	10 世紀	京文
土師器杯・椀・皿	構内各所	多数	９～ 15 世紀	京文

＊市埋：（公財）京都市埋蔵文化財研究所、総博：京都大学総合博物館、京文：京都大学文化財総合研究センター

〈参考文献〉

・小倉町別当町遺跡・北白川廃寺に関するもの

京都府　1934　『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告　第十九冊』
京都大学考古学研究会　1992　『岩倉古窯跡群』
（財）京都市埋蔵文化財研究所　1994　『平成２年度　京都市埋蔵文化財調査概要』
（財）京都市埋蔵文化財研究所　1996　『平成６年度　京都市埋蔵文化財調査概要』
京都市文化市民局　1996　『京都市内遺跡発掘調査概報　平成７年度』
京都市文化市民局　2010　『飛鳥白鳳の甍』（京都市文化財ブックス第 24 集）

・京都大学構内遺跡に関するもの

中村徹也ほか　1973　『京都大学農学部総合館周辺埋蔵文化財発掘調査の概要』
1974　『京都大学農学部総合館北棟建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の概要Ⅰ』
1975　『京都大学農学部総合館北棟建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の概要Ⅱ』
京都大学農学部構内遺跡調査会ほか　1977　『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和 51 年度』
京都大学埋蔵文化財研究センター　1978 ～ 2008　『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和 52 年度』～『京都大学構内遺跡調査研究年報　2003 年度』
1978　『京都大学埋蔵文化財調査報告第１冊―京大農学部遺跡ＢＧ 36 区―』
1981　『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅱ―白河北殿北辺の調査―』
1991　『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅳ―京都大学病院構内遺跡の調査―』
京都大学文化財総合研究センター　2009 ～ 2016　『京都大学構内遺跡調査研究年報　2004 年度』～『京都大学構内遺跡調査研究年報　2015 年度』

・鋳造遺跡に関するもの

五十川伸矢　2016　『東アジア梵鐘生産史の研究』（岩田書院）

・吉田泉殿町遺跡に関するもの

（財）京都市埋蔵文化財研究所　1998　『平成８年度　京都市埋蔵文化財調査概要』

・白河街区や六勝寺に関するもの

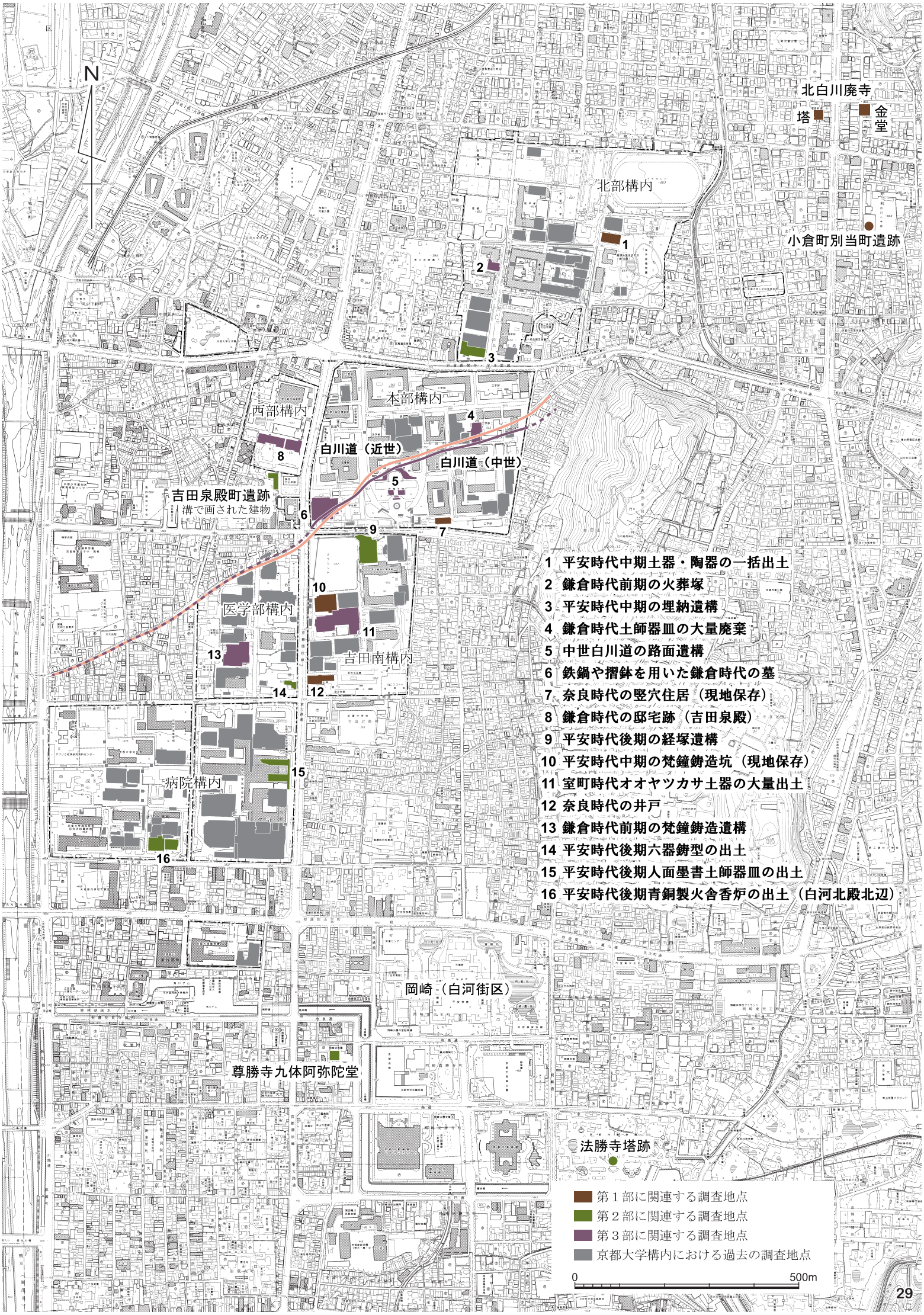
京都府　1925　『京都府史蹟勝地調査会報告　第六冊』
奈良国立文化財研究所　1961　『平城宮跡・伝飛鳥板蓋宮跡発掘調査報告　附尊勝寺跡発掘調査報告』
六勝寺研究会　1976　『六勝寺跡』
上村和直　1993　「白河に関する基礎的検討－調査と研究の動向－」『平安京歴史研究　杉山信三先生米寿記念論集刊行会』
㈶京都市埋蔵文化財研究所　1994　『平成元年度京都市埋蔵文化財調査概要』
（財）古代学協会　1994　『平安京提要』（角川書店）
（財）京都市埋蔵文化財研究所　2007　『院政期の京都　白河と鳥羽』
京都市文化市民局　2011　『京都市内遺跡発掘調査報告　平成 22 年度』
（財）京都市埋蔵文化財研究所　2011　『昭和 53 年度　京都市埋蔵文化財調査概要』

・勧修寺家文書に関するもの

京都大学文学部博物館　1991　『公家と儀式』
吉江崇　2014　『勧修寺家本『御遺言条々』の基礎的研究』

・その他、古代～中世の遺物に関するもの

上原真人　1978　「古代末期における瓦生産体制の変革」『古代研究』13・14
上原真人　1997　『瓦を読む』（講談社）
小森俊寛・上村憲章　1996　「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』３（（財）京都市埋蔵文化財研究所）
中世土器研究会　1995　『概説中世の土器・陶磁器』（真陽社）


N
北白川廃寺
塔
金堂
北部構内
小倉町別当町遺跡
1
2
3
本部構内
西部構内
4
白川道（近世）
白川道（中世）
8
5
吉田泉殿町遺跡
溝で画された建物
6
9
7
10
医学部構内
11
13
吉田南構内
14
12
病院構内
15
16
岡崎（白河街区）
尊勝寺九体阿弥陀堂
法勝寺塔跡
1 平安時代中期土器・陶器の一括出土
2 鎌倉時代前期の火葬塚
3 平安時代中期の埋納遺構
4 鎌倉時代土師器皿の大量廃棄
5 中世白川道の路面遺構
6 鉄鍋や摺鉢を用いた鎌倉時代の墓
7 奈良時代の竪穴住居（現地保存）
8 鎌倉時代の邸宅跡（吉田泉殿）
9 平安時代後期の経塚遺構
10 平安時代中期の梵鐘鋳造坑（現地保存）
11 室町時代オオヤツカサ土器の大量出土
12 奈良時代の井戸
13 鎌倉時代前期の梵鐘鋳造遺構
14 平安時代後期六器鋳型の出土
15 平安時代後期人面墨書土師器皿の出土
16 平安時代後期青銅製火舎香炉の出土（白河北殿北辺）
第１部に関連する調査地点
第２部に関連する調査地点
第３部に関連する調査地点
京都大学構内における過去の調査地点
0
500m

京都大学文化財総合研究センター設立 40 周年記念展示・文化財発掘Ⅳ

足もとに眠る京都
－考古学からみた鴨東の歴史－
飛鳥～室町時代編

京都大学総合博物館平成 30 年度企画展図録

2018 年２月 14 日発行

編集・発行 京都大学文化財総合研究センター

〒 606-8501　京都市左京区吉田本町

印刷・製本 三星商事印刷

〒 604-0093　京都市中京区新町通竹屋町下ル弁財天町 300